

報 告

家庭訪問のロールプレイング演習の効果と課題 —母親の不安解消につながる関わりとその難しさの分析—

Effect and issues of the role playing practice of the home visit: Analysis of student's approach to the mother for eliminating her anxiety and its difficulty.

千田みゆき, 荒川博美, 松岡由美子, 菊池チトセ, 山路真佐子, 加藤基子

MIYUKI Chida, HIROMI Arakawa, YUMIKO Matsuoka, CHITOSE Kikuchi,
MASAKO Yamaji, MOTOKO Kato

キーワード：家庭訪問, ロールプレイング, 不安解消, コミュニケーション技術, ベレルソンの内容分析

Key words : Home visit, role-playing, elimination of anxiety, communication skill, Berelson's content analysis

要 旨

4年制大学3年次看護学生に、家庭訪問場面の会話のみのロールプレイング演習を行った。この演習の効果と課題を検討する資料とする目的で、家庭訪問場面での母（父）親役学生が感じた不安解消につながる保健師役学生の関わりと保健師役学生の感じた家庭訪問の難しさについて、ベレルソンの内容分析法を用いて学生の記述を分析した。

その結果、母（父）親役学生の不安解消につながった保健師役学生の関わりとして、教育的対応、傾聴と共感の態度、順調な発達であるという説明、丁寧・わかりやすい言葉遣い、安心できる態度などがあげられた。保健師役学生が感じた家庭訪問の難しさとしては、話すこと・話し方、知識の重要性、緊張を和ませる会話の仕方、適切なアドバイス、不安への対応などがあげられた。

今回の演習を通して、学生は家庭訪問における援助者としての基本的態度を学ぶことができたと思われる。また、本演習は、対象者の不安を解消する上での自らのコミュニケーション技術の課題を学生自身が明確にする機会となったと考える。今回は会話の内容をある程度指定したが、もう少し学生自身の裁量でコミュニケーションを行うことができれば、より主体的に学習することができると思う。学生のコミュニケーション能力をアセスメントした上で、会話の自由度を上げることについて検討の余地があると思われる。

I. はじめに

家庭訪問は対象者の生活の場に赴き、対象者やその家族の思いを受け止め、対象者の生活、能力、健康状態等に応じた具体的な援助を提供する個別的支援方法であり、対象者が活用できる社会資源を開発し改善し、新たに事業を立ち上げ、地域支援体制を強化、発展させるた

めの保健師の重要な専門的技術である（岡田ら 1999：田村, 2008）。また、家庭訪問の効果については、住民の健康レベルの向上（藤原, 2008）、医療費節減（神山ら, 2006）、近年では特に育児不安の軽減や虐待事例の早期発見を念頭に置いた育児支援に有効であるという報告がある（羽原ら, 2006：橋本ら, 2007：永田ら, 2007：佐藤ら, 2005：都筑ら, 2002）。

受付日：2010年9月30日 受理日：2011年2月7日

しかし、その一方で、核家族化が進み家族や隣人と会話する機会が減少し、あるいはコンピューターや携帯電話の普及により、直接コミュニケーションをとる機会が減少したため、自分の気持ちを表現することが不得手の保健師が増えているという報告がある（舟木，2009；近藤ら，2007）。また、地域保健法が施行されて以降、地区担当制から保健師が各分野に分散して配置され、他職種と共に全地域を担当する分散配置が進んだ。これにより保健師の業務量が増え、比較的保健師個人の裁量に任される家庭訪問が削減される傾向にあると言われている（北岡，2004）。このような事態に対し、家庭訪問は有意義であり重要であるという保健師自らの声も上がっている（北岡，2004）が、新任保健師の中にも家庭訪問に苦手意識をもつ者は多く、業務に占める家庭訪問の割合は減少している（近藤ら，2007；大西ら，2008）。

ところで、平成19年の看護基礎教育の充実に関する検討会報告書では、卒業後のリアリティショックや早期離職の問題、学生のコミュニケーション能力の不足が取り上げられ、教育内容の充実をめざして平成21年度から新カリキュラムが施行されている。家庭訪問についても、上に述べたような現状があり、保健師においても同様の課題を抱えている。

本学看護学科の家庭訪問に関するカリキュラムは、2年次の地域看護学概論で概要について講義中心の学習をし、3年次の地域看護学活動論でロールプレイングによる学内演習を行い、4年次の地域看護学実習において保健師に同行して訪問実習をするというように段階的に進行する。しかし、ロールプレイングから保健師との同行訪問に移行する場合に比べ、講義で得た知識をロールプレイングとして行動に変換する場合、このプロセスをスムーズに進めない学生が見受けられる。これは、家庭訪問という一連の行動においては、単に成長発達や育児に関する知識、家庭訪問の手順や方法を理解しているだけでなく、他家に訪問した時の気配り、挨拶、敬語や丁寧語の使い方、相手の状況から健康課題を予測すること、相手の反応や変化に応じて会話内容を考えること、会話の導入からまとめまでを時間内に進行させることなど、多くの事柄を同時に考え実施することが求められるためであると考えられる。そこで、他の要素の影響をできるだけ排除して、知識として学んだ家庭訪問の意義や目的を踏まえ、家庭訪問時の援助者としての基本的態度や対応を学ぶことを目的に、訪問時の行動を含む従来のロールプレイング演習の前に、保健師役と対象者役との行動を含まない会話のみのロールプレイングによる演習（以下、会話演習）を試みた。既に、教員の行うロールプレイングを観察する演習の効果（錦織，1999）や、臨地実習の効果（山田，2008）に関する報告はあるが、会話演習の効果についての報告は見当たらない。そこで、訪問

目的である育児に関する不安の解消につながる保健師の関わりをどのように理解したか、また家庭訪問のどこに難しさを感じたかについて明らかにし、この演習の効果と課題を検討する資料としたい。

II. 研究目的

会話演習を通して、家庭訪問における母（父）親の育児に関する不安の解消につながる保健師の関わりと家庭訪問の難しさについて、学生が何を感じたかを明らかにする。

III. 研究方法

1. 対象

平成22年5月に家庭訪問の会話演習を行ったA大学看護学科3年生97名である。このうち8名は編入生であった。

2. 会話演習の内容

本授業時は、必修科目である「地域看護学活動論」における家庭訪問に関する初回の授業である。家庭訪問の意義、プロセス、留意事項などの講義の後、市販のVTRで母子訪問の流れを確認した。その後、学生は母（父）親役、保健師役になり、育児不安を訴える母親と保健師の家庭訪問での場面を、講義室の椅子に座った状態で、訪問時の行動を含まない会話のみのロールプレイングを行った。演習の目標は、家庭訪問時の援助者としての基本的態度と対応について理解することとした。

母（父）親については、夫（妻）と生後1か月児と暮らす専業主婦（夫）で、ミルクの飲みが悪い、泣いてばかりいる、夫（妻）が育児を手伝わない、友達がいないなどの不安を訴えるという設定とした。これらの不安を解消することが訪問目的である。演習は2人1組となり、学生は母（父）親役と保健師役になって約10分間演じた後、役を交代した。会話の内容は、家庭訪問時の援助者としての基本的態度や対応について理解するという演習目標を重点的に達成できるように、会話の進行や言葉の使い方などに対する心理的負担を軽減するため、一部を指定することとした。また、訪問目標を学生に明確に意識づけ会話の方向性を示すため、母（父）親役の最終の会話を「気持ちが少し軽くなった」とした。指定した会話を以下「」で表す。まず、保健師役学生は「こんにちは。B市保健師のC（保健師役学生の名前）です。このたびは、ご出産おめでとうございます。お誕生から1か月が過ぎましたので、赤ちゃんの健康状態を見せて頂き、育児についてのご心配がないかどうか伺いに参りました。」と挨拶する。その後、家の中に案内され、

身長や体重などを測る。次に、母（父）親役学生は体重が増えてないと訴え、育児に自信が持てないこと、周囲に相談できる人がいないことなどを話し始める。これに対し、保健師役学生は、発育は順調である、時には周囲の人の協力や社会資源の利用も必要であると話す。最後に、母（父）親役学生は「本当にいろいろと聴いてくださってありがとうございました。気持ちが少し軽くなりました。」と言い、保健師役学生は「わからないことがありましたら、いつでも保健センターにお電話くださいね。それでは失礼します。」と答えて訪問を終了する。

3. 研究の方法

会話演習終了後、質問紙を配布し、「不安解消につながった保健師の関わりは、・・・」と「家庭訪問で難しかったことは、・・・」を文頭においた文章完成法により、データを収集した。分析は、本研究の目的に従い、記述内容と目標を照らし合わせて結果を明らかにするのに適していると言われるベレルソンの内容分析で行った。ベレルソンの内容分析は表明されたコミュニケーション内容を客観的、体系的、数量的に記述する質的研究方法である(舟島,2000)。分析対象とする記録単位は単語とし、数量化した。文脈単位は文章とし、数量化する単語の意味を文章から体系的に捉えた。データを類似性に従って分類し、分類した塊に意味を検討してカテゴリーネームをつけ、カテゴリーごとの分析データ数を記述した。信頼性を確保するため、3名の検者により分類し、一致したものだけを採用した。

4. 倫理的配慮

調査用紙は出席した学生全員に配布した。回収前に、調査の主旨を説明し、結果は論文として公表されるが、記述内容は数量化され、匿名性は守られること、参加協力は自由であり、提出されたものは評価の対象にしないこと、また提出未提出に関する一切の利益不利益はないことを説明した。

IV. 結果

調査には97名中94名の参加協力の同意を得た。

1. 母（父）親役学生が不安解消につながったと感じた保健師役学生の関わり

母（父）親役学生が不安解消につながったと感じた保健師役学生の関わりとして、合計275件が抽出された。検者間で一致したものは260件、スコットの式(舟島,2000)による3名の検者の一致率は94.5%であった。本研究では一致したもののみをデータとして採用した(表1)。

最も多かったのは「教育的対応」63件であった。次

に多かったのは「傾聴と共感の態度」49件、「順調な発達であるという説明」31件、「丁寧・わかりやすい言葉遣い」18件、「安心できる態度」13件、「適切なアドバイス」13件、「話しやすい環境づくり」11件、「相談的対応」10件、「専門的対応」10件、「共に考える姿勢」10件、「いつでも頼れる安心感」10件、「一人ではないという気持ち」7件、「一つ一つに答える姿勢」6件、「子どもも自分も大切にしてくれる姿勢」4件、「自己選択できるアドバイス」4件、「気づき」1件であった。

2. 保健師役学生が感じた家庭訪問の難しさ

保健師役学生が感じた家庭訪問の難しさとして、合計195件が抽出され、検者間で一致したものは190件であった。スコットの式(舟島,2000)による3名の検者の一致率は97.2%であった。本研究では一致したもののみをデータとして採用した(表2)。

最も多かったのは、「話すこと・話し方」で39件あった。次に多かったのは、「知識の重要性」23件、「緊張を和ませる会話の仕方」21件、「適切なアドバイス」16件、「不安への対応」9件、「聴くこと」8件、「即時の対応」7件、「信頼関係の構築」7件、「解決策の提示」6件、「わかりやすい説明」6件、「人に説明すること」5件、「訪問目的に向かった話の展開」4件、「予測をもった対応」4件、「適切な判断」4件、「情報収集」4件、「介入の深さの判断」4件、「話のまとめ」3件、「対象に合った対応」3件、「限られた時間内の対応」3件、「スムーズな対応」3件、「一緒に考える態度」3件、「理由の説明」2件、「環境づくり」1件、「積極的姿勢」1件、「表情」1件、「守秘義務」1件、「焦り」1件、「気をつけること」1件であった。

V. 考察

1. 母（父）親役学生が不安解消につながったと感じた保健師役学生の関わり

母（父）親役の学生が育児の不安解消につながったと感じた保健師役学生の関わりとして、傾聴と共感の態度、安心できる態度、共に考える姿勢、一つ一つに答える姿勢、子どもも自分も大切にしてくれる姿勢、が記述されていた。舟木(2009)は、養育支援が必要な母への訪問のポイントとして、①母の気持ちを傾聴し、受け止めること、②話の内容を否定しない、③ありのままの状況を受け入れる、④虐待などの状況を訊く時は淡々と話す、⑤今までの育児での頑張りをおげらう、⑥母と一緒に今後の事を考えていきたいというメッセージを伝える、⑦関係性をつくる、⑧現状を改善するための行動と一緒に考える、ことをあげている。岡田ら(1999)は、家庭訪問では傾聴すること、個々の生活を見ること、個々

表1 不安解消につながる保健師の関わり

カテゴリー	記述例	件数
教育的対応	引越したばかりで友達がいないため、相談相手がいないということに対し、地域の保健センターにある育児学級や育児グループについて教えてもらうことができ、友達をつくることができることや夫と一緒に参加すれば夫の意識も高めることができるのではということを知ってもらった。	63
	生活環境や立場などを考えていろいろと教えてくれたので、今はどうしたら良いのかがわかりやすかった。	
	どんな社会資源があるのかを教えてくれて育児グループへの参加を勧められるなど、活用できるのに知らない情報を教えてくれた。	
傾聴と共感の態度	話を聞いてもらえるだけでもすっきりした気持ちになれた。	49
	話を親身になって聞いてくれた。	
	不安なことを話したら、その思いを受け止めて共感してくれた。	
順調な発達であるという説明	母乳が出ず、体重の増え方に不安があったが発達が順調といわれてほっとした。	31
	子どもの発育が順調だと言うことを教えてもらったことは不安解消につながりました。	
	体重があまり増えていなくて心配だったが、発育が順調であることを言ってもらえて不安が解消されました。	
丁寧・わかりやすい言葉遣い	育児、周囲の環境、児の発達など、様々な不安、心配ごとに対して丁寧な言葉遣いで母親が理解できるように説明してくれてよかった。	18
	わかりやすい言葉で不安の原因となっていた育児の悩みを解決できた。	
安心できる態度	発育に対して不安を持っていたが、専門職である保健師から正常に育っているということを知ることが最も不安解消につながったと思う。	13
	笑顔で目を見て話をしてくれたので、安心しました。	
適切なアドバイス	適切なアドバイスを与えられる。	13
	不安から適切なアドバイスをもらえることで不安が軽減された気がする。	
話しやすい環境づくり	はじめにたわいもない話をしてくれて少し緊張がほぐれた。	11
	何気ない会話もその場の雰囲気や和ませてくれた。	
相談的対応	利用できる社会資源を知ることができたので、相談できることを知り、とても安心しました。	10
	自分のことだけでなく、家族についてもいろいろ聞いてくれて自分の周りの環境の相談にものってくれたのが良かった。	
専門的対応	保健師という立場の人に順調に発育しているので大丈夫ですよとってもらえたこと。	10
	専門的知識で自分の子どもの発達状況が順調であることを教えてもらえたこと。	
共に考える姿勢	私の立場に立って一緒に考えてくれた。	10
	母乳を飲ませているが体重増加が少ないことについてミルクを併用するなど解決策を共に考えてくれた。	
いつでも頼れる安心感	知らせがあればいつでも向かうという言葉に元気を与えられた。	10
	いつでも連絡してくださいという言葉は心強いと感じました。	
一人ではないという気持ち	自分が一人ではないと気付けばそれだけでおのずと不安は解消されると思います。	7
一つ一つに答える姿勢	常にそうですね等の傾聴の姿勢がみられ、一つ一つの質問に関しての答えがあり、納得でき安心できた。	6
子どもも自分も大切にしてくれる姿勢	母親に対して体調を聴いてくれたときに、赤ちゃんのために来てくれたのに母親の自分の事も気にしてもらえたことがうれしかった。	4
自己選択できるアドバイス	それに対して「どうぞしてください」と言うのではなく、「試してみようですか」など自分で選べるようなアドバイスをしてくれた。	4
気づき	話しているうちに自分が何に対して悩んでいるのか気付くことができた。	1

表2 家庭訪問の難しさ

カテゴリー	記述例	件数
話すこと・話し方	どこに問題があるのか何を不安に思っているのかを考え、母親の聞きたいと思っている内容や不安を解消できるように話をするのも難しかった。	39
	どのような言葉を使えば相手の不安が解消されるのかを考えながら行ったが、少し間があいてしまったり、言葉に詰まったりしてしまうと相手はより不安になると思った。	
	どのような話し方をすれば安心感をもていただけるか。	
知識の重要性	育児など知識がないとアドバイスができない。	23
	新生児の発育の知識がないとしっかりと対応できないことがわかりました。	
緊張を和ませる会話の仕方	緊張を和らげる会話が難しかった。	21
	最初のお互いの緊張をほぐすための会話がごちなくなってしまう。	
適切なアドバイス	(難しかったのは)母親の悩みに対する適切なアドバイスをすることだった。	16
	悩みを聴いても適切なアドバイスや傾聴ができなければ母親の不安を増強させてしまうと思った。	
不安への対応	不安を解消するのが難しいと思った。	9
聴くこと	アドバイスしようとするのではなく、傾聴受容が大切であると思いました。虐待のある家庭などの場合はとても難しいのではないかと思います。	8
即時の対応	相談された内容から、すぐに母親が悩んでいることに対して答えるのがすごく難しかった。	7
信頼関係の構築	初めてだから仕方ないが信頼関係をきずくことは難しかった。	7
解決策の提示	いろいろな解決策を提示したりすること。	6
わかりやすい説明	専門用語を用いないでわかりやすく説明できるボキャブラリの多さも必要だと思った。	6
人に説明すること	対象者の方が安心してできるようにしっかりと説明をして不安を軽減していただくことが難しかった。	5
訪問目的に向かっての話の展開	お互い緊張しているはずなので、うまく季節の話から本来の目的へ持っていく流れが難しかった。	4
予測をもった対応	やはり事前の少しの情報から予測を立てておくのが大事だと思った。	4
適切な判断	生後1か月の発育発達の程度がわからないと、順調なのかどうかの判断ができないので難しかった。	4
情報収集	うちの様子から普段の生活を探ること	4
介入の深さの判断	他の悩みの相談にも何をどこまで言ってよいかかわからなくなった。	4
話のまとめ	訪問の最後に発達の状況などをまとめ、わかりやすく話そうと思っていたが、うまく今回の訪問についてまとめることができなかった。	3
対象に合った対応	相手の話を聴きながらその解決方法を相手に合った方法でアドバイスするのが難しかった。	3
限られた時間内の対応	限られてる時間の中でどの悩みに対してアドバイスするのかを考えなければと思いました。	3
スムーズな対応	冷静に頭の中で整理して指導するためには対応をスムーズにできるようにならなければいけないと思った。	3
一緒に考える態度	その人に合っていないものや保健師の意見を押し付けてしまってもいけないので、対象者と一緒に考えていくことが大切だと思った。	3
理由の説明	ただ励ましているという風にとられないよう、きちんとした理由や考えをつけながら話してみたこと。	2
環境づくり	二人で協力して子育てができる環境をどのように作るかが大切だと思った。	1
積極的姿勢	自分では納得してもらえたと考えても、相手にはまだ不安が残っていることもあるのもっと積極的にかかわっていく姿勢が必要だと思いました。	1
表情	どのような表情で話したらよいかわからなかった。	1
守秘義務	守秘義務を守ることの大切さを学んだ。	1
焦り	目標を達成しようと焦ってしまう。	1
気をつけること	家庭訪問なので生活スペースなどを汚さないようにしたり気をつけることが多くあると思った。	1

のニーズを発掘することが重要であると述べている。「傾聴と共感の態度」に分類された学生一人一人の記述には、話を聞く、傾聴する、受け入れる、受け止める、一緒に考える、頑張りを認めるなどがみられた。不安のある対象者への保健師としての基本的態度・姿勢に関する記述数は多く、このことから、家庭訪問時の援助者としての基本的態度についてはよく理解され、本演習の目標は達成されたと思われる。

また、学生は、教育的対応、順調な発達であるという説明、丁寧・わかりやすい言葉遣い、適切なアドバイス、話しやすい環境づくり、相談的対応、専門的対応、自己選択できるアドバイス、が不安解消に有効であることを体験していた。教育的対応には社会資源等の情報提供や、具体的解決策の提示に関する記述が多かった。これらは2年次の地域看護学概論の中で地域保健活動として学んでいる事柄であった。演習前に、再度の学習は行わなかったが、学生の記述から、前年度の学習を基盤として新たな学習ができたと思うことができる。また、順調な発達であるという説明、適切なアドバイス、相談的対応、専門的対応に関する記述は、いずれも専門的知識の裏付けのもとに展開される行動である。本学科では、医学的知識を活用し科学的根拠を持った適切な判断をすることを学生への目標の一つとして示しているが、これらの記述から、これまでの学習の中でこのことを着実に修得しつつある学生の様子が伺われた。

さらに、いつでも頼れるという安心感を得、一人ではないという気持ちになり、気づきを得たと感じた者もあったが、これは、家庭訪問における基本的態度や姿勢に基づいた専門的な対応がなされた結果として生じた思いであると思われる。

2. 保健師役学生が感じた家庭訪問の難しさ

一方、家庭訪問の難しさとして学生が感じたことは、話すこと・話し方、緊張を和ませる会話の仕方、聴くこと、わかりやすい説明、人に説明すること、話のまとめ、理由の説明などのコミュニケーション技術や、不安への対応、対象にあった対応、一緒に考える態度などの信頼関係を構築するために必要な対応や態度であった。自分の気持ちを表現することが不得手な保健師が増えているといわれる（舟木，2009；近藤ら，2007）が、基本的なコミュニケーション技術を身につけておくことは、あらゆる看護活動の基盤となると考える。また、その対象者とは一度限りの出会いになり得るので、初対面の家庭訪問であっても、ある程度の信頼関係を結べなければ、継続したその後の保健指導の機会は潰えることになる。その意味で、コミュニケーション技術は保健師にとって特に重要である。さらに、保健師の対象は学識のある者から全く専門的知識のない者まで、あるいは高齢者や乳幼

児までと幅が広い。時には、専門的知識のない対象者であってもわかりやすく説明しなければならない場面もある。対象者の状況を十分に把握した上で、その場で即時に介入の深さを判断し解決策を提示するなどの対応が求められる。また、他家を訪問するという特徴から、家庭訪問は限られた時間内でさりげなく観察し、情報収集し、ニーズを予測しながら、あるいは予期せぬ事態が生じようとも、知識に裏付けられた判断のもとに即時に適切なアドバイスを行い、訪問時間内で話を展開しまとめなければならない（田村，2000）。短い演習時間ではあるが、今回の学生の記述から、学生はしっかりこれらの技術の必要性和難しさを感じていると思われる。このような学生の気づきを今後の演習や実習につなげて学習できるように、今後は本演習での体験を意味づけていく必要があると感じた。

3. 本演習の課題

初対面の母親と会話をする事自体、初めて家庭訪問を学んだ学生にとっては非常に緊張することである。そのような緊張の中で、学んだ知識を手繰り寄せ、限られた時間の中でアドバイスをを行うことは、学生にとっては非常に難しいことであったと推察される。今回の演習では、家庭訪問時の援助者としての基本的態度と対象者への対応を理解することに目標を絞って行ったため、目標が明確となり達成が可能となったと思われる。同時に、コミュニケーション中心に行ったため、自分のコミュニケーション技術の課題を学生自身が自覚する機会になったと考える。学生自身の課題が明確になったので、その点では、今後の主体的な取り組みが期待できると思われる。しかし、一方で学生の関心はコミュニケーション技術と対象者への対応に集まり、家庭訪問で得た個人のニーズや健康課題を地域住民全体の健康課題につなげ地域保健事業に活かすことについて考えられている記述はみられなかった。次なる学習段階として、個人・家族への保健活動を集団・地域への保健活動に広げることの重要性を体験的に学習できるように、これから実施するロールプレイングの状況設定を工夫する必要があると考える。

また、今回の演習においては、10分という時間内に会話の導入からまとめまでを体験できるように、会話の内容をある程度指定したが、もう少し学生自身の裁量でコミュニケーションを行うことができれば、より主体的に学習することができると思う。学生のコミュニケーション能力をアセスメントした上で、会話の自由度を上げることについても、検討の余地があると思われる。

文 献

- 藤原由紀 (2008)：家庭訪問を重視した保健師活動，保健師ジャーナル，**64**(8)，696-700.
- 舟木文華 (2009)：家庭訪問時のコミュニケーション，保健師ジャーナル，**65**(7)，530-535.
- 舟島なをみ (2000)：質的研究への挑戦，医学書院，東京.
- 羽原美奈子，近藤明代，笹原千穂，他 4 名 (2006)：保健師の家庭訪問に関する海外文献の検討，日本公衆衛生学会総会抄録集，**64**，540.
- 橋本美幸，江守陽子 (2007)：市町村の母子保健サービスとしての新生児訪問事業の現状と課題，母性衛生，**48**(2)，262-270.
- 神山吉輝，高橋英孝，川口毅 (2006)：高齢者に対する保健師の家庭訪問保健事業による医療経済効果，日本公衆衛生学会総会抄録集，**64**，807.
- 北岡英子 (2004)：保健婦活動の原点・家庭訪問，保健師ジャーナル，**60**(2)，186-192.
- 近藤明代，大西章恵，羽原美奈子，他 4 名 (2007)：行政保健師の家庭訪問に対する認識，日本地域看護学会誌，**10**(1)，35-41.
- 厚生労働省医政局看護課 (2007)：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書.
- 永田雅子，伊藤恵子，鈴木茜，他 1 名 (2007)：地域の母子保健活動における EPDS の活用についての検討—新生児訪問および3カ月児検診時の母親の EPDS の結果をもとに—，母性衛生，**48**(2)，289-294.
- 錦織正子 (1999)：保健師の行う家庭訪問の学習を深める教育方法—母子事例への初回訪問場面のロールプレイ観察を通して—，日本地域看護学会誌，**1**(1)，68-74.
- 岡田麻里，小西美智子 (1999)：地域ケアシステム構築の方法論と保健婦の能力に関する研究—その1—システム構築のために保健師が用いた能力，日本地域看護学会誌，**1**(1)，50-55.
- 大西章恵，近藤明代，笹原千穂，他 4 名 (2008)：現場の声から探る家庭訪問の現状，保健師ジャーナル，**64**(8)，684-689.
- 佐藤厚子，北宮千秋，李相潤，他名 (2005)：保健師・助産師による新生児訪問指導事業の評価—育児不安の視点から—，日本公衆衛生雑誌，**52**，328-337.
- 田村須賀子 (2000)：臨地実習で伝えたい家庭訪問援助の特質，保健婦雑誌，**56**(4)，293-299.
- 田村須賀子 (2008)：熟練保健師の実践から学ぶ—家庭訪問の意義と技—，保健師ジャーナル，**64**(8)，702-709.
- 都筑千景，金川克子 (2002)：産後1か月前後の母親に対する看護職による家庭訪問の効果—母親の不安と育児に対する捉え方に焦点を当てて—，日本公衆衛生雑誌，**49**，1142-1151.
- 山田淳子，中山かおり，齋藤智子，他 1 名 (2008)：地域看護学実習における学生の学びからみた家庭訪問実習の効果と課題，日本地域看護学会誌，**11**(1)，81-86.